The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第7講　万博を読み解く（1）
Author(s)	福田, 州平
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 12, p. 74-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48362
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第7講
万博を読み解く(1)

1. 第3部の位置づけ

おはようございます。第1部そして第2部と、「当たり前のことを批判的に捉える」ということをお話してきました。第3部では、「近代を乗り越えることができるか?」と題してみました。まず、その意味を第3部のイントロダクションとしてお話したいと思います。

まず、「近代」とは何なのでしょうか?　前々回あつかいましたウォーラーステインは、近代について、こんなことをいっています。「『近代』とは、資本主義的世界=経済のなかで発達した習慣、規範、実践のなにもかもをそこに放り込んで表現するための言葉である。近代とは、定義上、真の普遍的価値(ないしは普遍主義)の体現であるため、それは、単に道徳的善であるだけでなく、歴史的必然性であるということにもなった」(ウォーラーステイン 2008: 74)。

これは、ヨーロッパ的普遍主義を導く論理につながります。また、『オリエンタリズム』や「テロリズム研究」も、こうした近代の考え方の発露です。そして、ヨーロッパ的普遍主義は、私たちの考え方や国際政治の干渉問題だけでなく、さまざまな面で影響を及ぼしていると考えねばなりません。ヨーロッパで発達してきた科学技術の普遍化は、まさしく近代のたまもので、私たちの生活を豊かにしている反面、さまざまな文化を消すことにもつながっています。また、近代で重視される経済成長は、あらゆるものの商品化にもつながり、今ではその「限界」がきているといわれています(武者小路 2011: 4-5)。

となると、私たちはどうにか近代といわれているものを乗り越えなければならないようです。第3部では、まず、第7講から第9講にかけて、近代そのものについて別の角度から、もう少し考えてみます。つづいて、第10講で、近代の限界としてのグローバル・クライシスを扱います。そして、第11講では、近代を乗り越えるための指針ないしはヒントとしての人間の安全保障についてお話します。

2. 万国博覧会(万博)とは

さて、今回、そして次回と、万国博覧会についてお話します。講義を聴いているなかでつかんでいただけるかと思うのですが、万博の歴史は、まさに近代化の歴史そのものです。工業化や娯楽、自己と他者、さらには近代国家のイデオロギー、あるいは対外関係などが複雑にからみあっています。

写真1: 日本産業館の行列(写真提供:福田亜紀)

写真2: 北朝鮮館(写真提供:福田亜紀)

写真3: 「万博パスポート」にスタンプを押してもらう人たち(写真提供:福田亜紀)

万博と聞くと、わりとよいイメージをもって語られることが多いかと思います。文化的な平和なイベントだと思われている方は、少なくないのではないかと思います。また、多くの日本国民が足を運んだ1970年の大阪万博は、最近でもマンガに登場したり、あるいは岡本太郎のイメージの強さなどから、その当時生まれていなかった若い人たちの間でも知られている国家的な大イベントです。大阪万博は、日本の高度経済成長の姿と重ね合わせ、ある種のノスタルジーとともに語られることが多いような気もします。しかし、大阪万博も、決して政治やイデオロギーとは無縁だったわけではありません。

2010年に中国の上海で万博が行われたことは、皆さんも記憶に新しいところかと思います。上海万博は、正式名称を「中国2010年上海世界博覧会」といいます。中国語では、万国博覧会ではなく、世界博覧会といいます。「より良い都市、より良い生活」をテーマにかかげ、2010年5月1日から10月31日まで、上海で開催されました。参加国および参加国際機関の数は、計246。入場者数は、約7300万人でした(上海万博事務協調局 2010)。これは、これまで開催された万博のなかで、もっとも多い数です。その入場者数の多さからか、パビリオンや入場ゲートに並ぶ長蛇の列についての報道が日本でもありました。日本産業館はけっこう人気があったようですが、私の妻が上海万博に行ったときは、写真のように入場まで2時間30分待ちでした。また、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)が初めて参加したことでも注目されました。

上海万博では、各パビリオンのスタンプ集めが中国の人たちの間で流行ったようです。パスポートを模したスタンプ帳をもって、パビリオンに行って、そしてスタンプをもらうというものです。このスタンプにまつわる悲喜こもごもは、日本のメディアでも取り上げられましたので、ご存知の方もいらっしゃるかもしれません。

さて、万博を定義するとしたら、どうなるでしょうか？　実は、1928年の国際博覧会条約という国際条約の第1条のなかで、次のように定められています。

1. 博覧会とは、名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とする催しであって、文明の必要とするものに応ずるために人類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは二以上の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう。
2. 博覧会は、二以上の国が参加するものを、国際博覧会とする。
3. 国際博覧会の参加者とは、当該国際博覧会に公式に参加している国の陳列区域にあるその国の展示者、国際機関、当該国際博覧会に公式には参加していない国の展示者及び当該国際博覧会の規則により展示以外の活動特に場内営業を行うことを認められた者をいう。

国際博覧会が、要するに万博のことです。現在、万博には、登録博覧会と認定博覧会の二つの区分があります。両者の区別は、開催期間、開催地の規模、パビリオン建設にまつわる費用の負担などが異なっています。そして、国際博覧会条約に基づいてできた博覧会国際事務局(Bureau International des Expositions, BIE)という国際組織が、博覧会の登録ないしは認定を取り仕切っています。博覧会の開催を行いたいと思う国が申請し、それをBIEが審議して、承認するというのが大雑把なプロセスです(図1)。

登録博覧会	
開催間隔	5年
最大開催期間	6ヶ月
参加者	国家、国際機関、市民社会、企業
パビリオン建設	デザインおよび建設は参加者
会場規模	制限なし

認定博覧会	
開催間隔	二つの登録博覧会の間に開催
最大開催期間	3ヶ月
参加者	国家、国際機関、市民社会、企業
パビリオン建設	開催者が参加者に施設を用意
会場規模	最大25ヘクタール

参照：http://www.bie-paris.org/site/en/main/rules.html

図1: 登録博覧会と認定博覧会の違い

とはいうものの、この条約に基づかないけれども「万博」と認識されているものもあります。1964年から65年にかけて開催されたニューヨーク世界博覧会が、それにあたります。また、これから万国博覧会および博覧会の歴史をたどろうとしているのですが、国際博覧会条約ができたのは1928年ですので、それ以前のものにこの条約の定義をそのまま当てはめることができるかといえば、ちょっと難しいかもしれません。そこで、この講義では、吉見俊哉先生の使った定義(吉見 2010: 34)に従って、以下のように考えたいと思います。

博覧会：展示内容が広範囲にわたる規模の大きな展示イベント
国際博覧会（＝万博）：多数の国々が参加して催された大規模な博覧会

3. 高度経済成長とポスト経済成長

この講義で万博を取り上げようと思ったきっかけは、先ほどお名前をだしました吉見俊哉先生の著書『博覧会の政治学』を手に取ったことでした。この本の「文庫版あとがき」で、吉見先生は面白いことを指摘しています。それは、日本、韓国、そして中国では、経済成長のシンボルとして夏季オリンピックと万博がセットで行われてきたということです(吉見 2010: 288-289)。これを図にすると、図2のようになります。

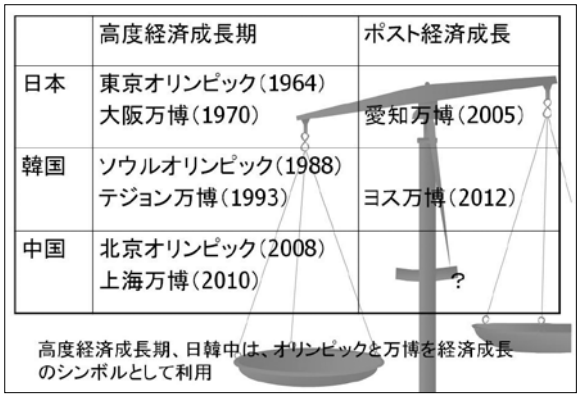

図2: 高度経済成長期における日韓中のオリンピック万博セット

いかがでしょうか？　日韓中の3ヵ国で、共通してこのような現象が見られることは、非常に興味深いと思います。3ヵ国におけるオリンピックと万博の位置づけを詳細に分析し、そして比較すると面白い結果が得られると思うのですが、残念ながら私の力では手に負えません。そこで、日本の高度経済成長期に行われた大阪万博と、ポスト経済成長期に行われた愛知万博をこの講義では扱いたいと思います。

3.1　愛知万博

まず、愛知万博から取り上げたいと思います。愛知万博の正式名称は、「2005年日本国際博覧会」といいます。2005年3月25日から9月25日にかけて、愛知県で行われ、約2200万人の入場者をあつめました(財団法人地球産業文化研究所 2013)。そして、この万博のテーマは、「自然の叡智(Nature's Wisdom)」でした。正式名称には「愛知」が入っておらず、その代わりに「日本」

となっています。これは、後ほどお話しする大阪万博とも共通しています。

さて、愛知万博は、もともと名古屋市がオリンピック誘致でソウル市に負けたことから、その構想がスタートしたといわれています。以下、まず吉見(2011)に沿って、愛知万博の概要についてお話をしたいと思います。当初は、地域振興の起爆剤として考えられていて、「科学・産業」の振興が軸となっていました。こうして計画が始まり、当時の愛知県知事は、1990年に「21世紀万博基本問題懇談会」を立ち上げて、「技術・文化・交流—新しい地球創造」を基本テーマとして打ち出しました。しかし、同時に自然保護の立場からの反対運動もおこりました。

やがてバブル景気がはじけ、また世界で万博への風当たりが強くなる時代が訪れました。こうした状況のなか、通産省が音頭を取って、1995年11月、“Beyond Development”をテーマとし、万博を環境調和型の街づくりの実験として規定した万博構想をうちだしました。とはいうものの、環境をテーマとすると避けて通れない市民参加をどうするのかについては検討が不十分でしたし、また会場跡地を住宅地にする愛知県の計画とテーマは矛盾していました。矛盾は解決しないままでしたが、1997年6月に日本は万博の開催権を獲得し、その年の10月に「2005年日本国際博覧会協会」が設立されました。万博の開催理念は環境志向でしたが、会場計画、およびその跡地利用や市民参加システムといったさまざまな面で問題をかかえたままでした。

1999年になると、こうした状況は変わっていきます。まず4月に、会場候補地の「海上(かいじょ)の森」の内でオオタカの営巣が発見されたのです。これを受けて、愛知県は、青少年公園など既存施設を分散会場として利用する方針を固めていくことになります。しかし、この時点でも愛知県は跡地に新住宅地を作る計画をかたくなに守っていました。この状況に風穴を開けたのは、11月に会場視察のため来日したBIE幹部らが、愛知県の跡地利用計画を強く批判したことでした。翌年の年4月、ついに愛知県は新住宅地事業および道路建設を断念し、今後の海上の森の保全と活用を地元関係者と消費者団体、有識者の意見を幅広く聞いて検討することで合意に至りました。5月には、「愛知万博検討会議(海上地区を中心として)」が誕生し、海上地区の会場計画の縮小のほか、愛知県長久手町にある青少年公園地区を主会場とする利用計画、観客輸送計画、市民万博としての広域展開万博などを盛り込んだ案をまとめました。しかし、事態はまだまだ収まりがつかない状況がつづきました。

この事態を打開できる人物として白羽の矢がたったのが、大阪万博を成功に導いたとされる作家の堺屋太一さんでした。堺屋さんは、事態を懸念した中部財界からの要望をうけ、2001年3月、博覧会協会最高顧問として就任しました。そして、はじめから会場計画を見直すことを示唆し、青少年公園に隣接する土砂採取場を新たな会場とするなどの試案を提示しました。堺屋さんは、これまでの経緯を無視し高圧的な手法ととったために、関係諸方面と対立してしまい、やがて最高顧問を辞任する事態に追い込まれます。では、堺屋さんの案がまったくだめだったかというと、かならずしもそうではなかったようです。というのは、土砂採取場を会場として利用し、そこで長い期間をかけて自然を再生する実験場とする計画が案に含まれており、“Beyond Development”のテーマにふさわしい革新的な要素が含まれていたのです。

堺屋さんが表舞台から去り、10月に博覧会協会は、新たな体制を整えます。そして、その2ヶ月後に「『自然の叡智』を縦糸に、『地球大交流』を横糸に幅広い参加と交流の博覧会」を開催するとの基本計画をようやくまとめました。通産省が出した“Beyond Development”というコンセプトの流れは「自然の叡智」でかろうじて継承され、そして21世紀万博基本問題懇談会の「技術・文化・交流—新しい地球創造」が「地球大交流」として復活したのです。そして、前者をシンボルとしつつ、後者を万博の顔としていこうとする計画になりました。「地球大交流」へと重心をかえたことによって、「市民参加」がますます強調されるようになり、市民参加を愛知万博の柱にするという流れは、以後、かわりませんでした。しかし、吉見先生は、この「市民参加」が、あくまでも会場計画の根本を修正しない、限定された実践としてのみ承認されていたと指摘しています。

愛知万博は、そのプロセスはともかく、大阪万博のように森や山や谷を切り開いて平地にし、未来の幻想に満ちた人工的な都市空間を作り出さなかったという点では評価できるのかもしれません。そして、海上の森を会場地に設定したことは、ユニークな試みだったといえるでしょう。また、後ほどお話します大阪万博のように一流の建築家たちが最先端の技術を用いて作った未来を示すような建物も、愛知万博にはみあたりません。したがって、愛知万博は、これまでの万博の歩みを自己批判する万博となる可能性があったわけです。愛知万博は、目標(1500万人)を上回る入場者(2200万人)を集めました。万博協会の「運営費」の収支決算は、大幅な黒字だったため、万博は「成功」したといわれています。しかし、結局こうした興行面での成功を達成することに気を取られてしまい、近代化批判としての意義をそこに見出そうとする試みは少なかったといえます。この意味で、建築評論家の五十嵐太郎先生は、愛知万博は「失敗することに失敗した」万博だったと論じています(五十嵐 2010: 208)。

3.2　大阪万博

愛知万博から遡ること35年前の1970年3月15日から9月13日にかけて、

大阪の吹田市で開催されたのが大阪万博です。さきほどと同じように、吉見（2011）に沿ってお話をしたいと思います。大阪万博は、「人類の進歩と調和」をテーマにかかげ、入場者数は約6400万人でした。この万博の正式名称は「日本万国博覧会」といい、実は正式名称に「大阪」というコトバは入っていません。それには、ある政治的な意味がこめられているのですが、その話は後ほど触れます。

さきほどお話したように、愛知万博では、会場予定地でオオタカの営巣が見つかったことが、万博と環境問題との接点という意味で、非常に重要な意味をもっていました。しかし、大阪万博では、愛知万博のように会場予定地をめぐって自然保護運動が展開されるということはなかったようです。会場となった千里丘陵は、もともと丘、谷、池あるいは竹林が生い茂るところでした。しかし、パビリオンをたくさん建てる必要から、大規模な土地造成がなされ、自然は消去されています。現在、同様のことを国家イベントの会場建設のためにやろうとすれば、大掛かりな自然保護運動が展開されることでしょう。しかし、大阪万博の会場のための工事が、社会的な問題となることはなかったようです。

愛知万博のテーマ作成は、かなり紆余曲折がありました。では、大阪万博ではどうだったのでしょうか。大阪万博のテーマは、1965年に設置された大阪国際博覧会準備委員会で検討されたものです。この委員会には、委員長は茅誠司（物理学者・元東大総長）、副委員長は桑原武夫（フランス文学者）が就任し、委員も当時の日本を代表する錚々たる知性が集結していました。委員たちの議論は、西洋近代を普遍化していこうとする西洋中心主義思考に対する批判、そして科学技術がもたらした人類を滅ぼしかねない問題、東西冷戦や南北格差など、かなりの危機意識がにじみでていました。そして、委員会は、人類が直面している「不調和」を「知恵」でいかに乗り切っていくかで一致し、大阪万博の統一テーマとして、「人類の知恵 Man and their Wisdoms」が有力案として浮上しました。しかし、これがモントリオール万博の「人間とその世界 Man and His World」と似ているとの懸念があって、大阪万博の統一テーマは「人類の進歩と調和」に落ち着きました。「不調和」は「調和」に、「知恵」は「進歩」に包摂されたのです。そして、統一テーマに基づいて、4つのサブテーマが定められました。

こうしてできあがったテーマは、当時としては、世界的に見ても非常に卓越したものだったと思います。しかし、具体的なパビリオンや展示に反映させていく系統だった仕組みはなんら確立されていませんでした。また、愛知万博とは異なり、委員会は市民との連携、あるいは市民との対話という観点も欠けていました。こうして、委員会が議論してつくったテーマは、万博の「キャッチフレーズ」となっていきます。そして、丹下健三らが設計した「お祭り広場」や、岡本太郎デザインの「太陽の塔」によって、万博を「祭り」として演出していこうとする傾向が支配的になっていきます。さらに、大阪万博の展示は、「人類の進歩と調和」のうち、調和よりも、科学技術による「人類の進歩」を象徴する展示が多かったといわれています。国内パビリオンでは、進歩を取り上げるのは簡単ですが、調和を表現することは難しいことから、未来を称揚する展示となってしまいました。

むしろ、「不調和」を排除する動きがありました。たとえば、こんな事件がありました。1970年7月5日、「東京・水俣病を告発する会」の巡礼団が万博会場東口に到着しました。一行は、水俣病の被害を訴え、公害問題を抱える街を巡礼し、万博会場にやってきたのです。そして、ビラ配りと署名活動を開始しようとしたところ、万博協会側は、署名カンパの禁止規則をタテにこれを拒否しました。また、カンパをしようとした老女に対して、ガードマンは手を抑えてこれを制止しようとしたのです。また、日本館での歴史展示では公害で苦しむ市民の姿はなく、また原爆の展示も「かなしみの塔」という非常にわかりにくいものだったと指摘されています。さらに、テーマ館で計画された原爆展示は、政府や自治体から横槍が入り、結局、展示内容を変えざるをえなくなったそうです。

他方、原子力発電は、大阪万博では、未来のイメージに彩られたものとして捉えられていました。万博開会式の日、日本原電敦賀発電所が運転を開始し、会場の電光掲示板には「これは原子力の電気です」との表示がでて、万博会場への送電を担いました。また、電気事業連合会のパビリオンである電力館では、「人類とエネルギー」をテーマに、火打石から原子力発電までのエネルギーの歴史をあつかった「太陽の狩人」という映画が、巨大なスクリーンで上映されました。また、このパビリオンでは、原子力発電を中心に電気エネルギーへのあこがれと親しみを与えることを狙った展示が行われ、原子炉炉心部の実物大模型の展示や、10万ボルトの放電スペクタクルなどが行われたそうです。その他のパビリオンでも、さまざまな形で先進技術が切り開く明るい未来の生活の姿が演出されたのですが、その実現には十分な電力供給が必要となります。こうして、原子力は、「月の石」などに象徴される宇宙開発とともに、明るい未来の生活に人びとをいざなう象徴として歓迎されることになります（武田 2011: 129-155）。

ところが、「明るい未来」は幻想にすぎなかったことを、大阪万博終了後、人びとは思い知ることになります。まず、万博終了後の1972年、世界的な識者の集まりであるローマクラブが、100年以内に地球にカタストロフィーが訪れるとする『成長の限界』を出版し、世界的な注目をあびました。同年には、

環境問題や南北問題をとりあげた人間環境宣言（ストックホルム宣言）が採択され、環境問題への関心がたかまりました。さらに、1973年にはオイルショックが日本を襲いました（武田 2011: 129-155）。こうした現実の「不調和」を前にして、大阪万博の「明るい未来」は消えていくことになります。

4. 幻の万博

愛知万博にしろ、大阪万博にしろ、正式名称に開催地の名前が入っていないということに少しだけふれました。これを手がかりに、さらに万博の歴史をさかのぼってみましょう。第2次世界大戦前、ドイツ、イタリア、そして日本の3ヵ国がそれぞれ構想し、その実現が幻におわった万博があります。それが、ドイツの「ベルリン万国博覧会（1950年）」、イタリアの「ローマ万国博覧会（1942年）」、そして日本の「紀元2600年記念日本万国博覧会（1940年）」です。いずれも第2次世界大戦によって、「幻の万博」となってしまいました。しかし、ここでわざわざとりあげようとするのは、第2次世界大戦以前、万博と帝国主義的なイデオロギーはまったく矛盾しないどころか、むしろそれを広げるための装置として認識されていたことを如実に示すからです（吉見 2010: 224）。この講義では、古川（1998）の内容に沿って、1940年に開催する予定だった日本の万博を取り上げたいと思います。

1940年の万博の名称を見て、気がついた方がいらっしゃるかもしれません。実は、1940年の万博と大阪万博の正式名称は、ほぼ同じなのです。違いは「紀元2600年記念」というコトバがつくかどうかです。では、紀元とは何でしょうか。紀元（皇紀）とは、伝説の初代天皇である神武天皇即位の年とされる西暦紀元前660年を元年とする日本の紀年法（年を数え記録する方法）のことです。明治5年（1872年）、太政官布告第342号により正式な紀年法となり、法制化後は、公文書、日本史（国史）の教科書などでは元号や西暦とともに併用され、一般庶民にも知られていきます。皇紀は、天皇の君臨と重なることから、日本が世界有数の長い歴史をもつ国家であるという観念が生まれたといわれています。そして、西暦1940年は、紀元でいうと2600年にあたるのです。

この紀元2600年に、東京でオリンピックと万博を開催しようとする計画が、1930年からはじまります。オリンピックのほうは、第12回大会の開催年が1940年だったことから、誘致に成功すればアジア初の開催となって紀元2600年を祝うのにふさわしいと、当時の東京市長が動きだすことにはじまります。万博のほうは、民間と東京市などの自治体などで構成される団体が活動をはじめました。万博は、当初は1935年開催案もあったのですが、不況の影響で1935年では開催準備が間に合わないため、1940年の開催をめざすことになります。そして、国会へ積極的に働きかけました。

こうして、やがて政府がうごくことになりますが、オリンピックと万博は、紀元2600年を祝うイベントの一環として、つまり天皇制のイデオロギーを国民に広めかつ強める装置として認識されていました。正確にいえば、国際オリンピック委員会がオリンピックと別の行事との抱き合わせを嫌ったため、オリンピックは紀元2600年を祝う公式事業（奉祝記念事業）からはずされました。しかし、実質的に、オリンピックが紀元2600年のためのイベントとして認識されていることは明白でした。そして、1936年7月、日本はオリンピックの開催権を獲得します。

万博のほうは、主催者、国庫負担の問題、さらに開催資金をくじ付入場券の前売りでまかなうことの是非などでもめましたが、当時の万博協会の会長の尽力によって解決へと向かいます。万博の開催にあたって作られた計画では、会期を1940年3月15日から8月30日とし、会場は東京と横浜の二箇所とし、総入場者数を4500万人と想定しました。そして、開催趣旨は、「紀元2600年を奉祝記念するため、内外産業文化の精華を収集展示し、もって東西文化の融合に資し、世界産業の発達および国際平和の増進に貢献する」ことを目指し、「あまねく世界に日本精神を宣揚し、本邦産業文化の真価を顕示し、躍進日本の真の姿を認識せしむることは意義深い」ものがあると書かれていました。第一会場である東京に立てられる予定だった建国記念館の設計は、コンペ形式でおこなわれ、国家主義的色彩の強いものが当選しました。1938年3月には、12枚綴り1組10円の割増金付前売入場券が売り出され、100万枚が完売しました。また、「日本万国博覧会行進曲」というテーマソングもつくられました。こうして、国民の間では万博ムードが盛り上がっていきます。

準備を整えつつあったオリンピックと万博ですが、日中戦争の激化によって国際的な批判が高まったことから、両イベントの開催返上問題が浮上するようになります。また、アメリカの不況の影響で、輸出が不振となり、外貨準備額が当初の想定よりも少ないことがわかりました。そして、日中戦争遂行と軍備拡充のため、戦争と関係のない土木建設工事は中止されることになりました。また、鉄鋼統制も強化されて、IOCから要望された10万人規模のオリンピック主競技場建設は不可能な状態に追い込まれました。他方、万博は、入場券をすでに販売していたことから中止は考慮されず、予定通りの開催か開催延期かが検討されました。そして、1938年7月15日、政府は閣議でオリンピックの返上と万博の日中戦争終了後までの延期を決定したのです。政府は、日中戦争遂行のための「物心両面」の「総動員」を、この決定の理由としました。つまり、単なる資材不足や日中戦争に関する諸外国の反対が理由だけではなく、長期戦争体制確立を国民にアピールし、オリンピックの返上と万

博の延期を国民統合の強化に役立てることを意図していたといわれています。

注意していただきたいのは、1940年の万博は、開催の中止ではなく延期だったということです。では、いつまで延期されたのか？　ここまできて感づかれた方が多いと思います。1970年の大阪万博が、延期されてようやく実現された万博だったと解釈できるのです。事実、延期された1940年の万博の入場券は、1970年の万博でも使用できました。欠損がない1940年の万博入場綴り1冊につき、大人1名、子供2名の入場が認められる特別入場券が交付され、実際に、3077枚の特別入場券が交付されました。なお、愛知万博でも使うことができたそうです。

1940年に計画されていた万博は、天皇制のイデオロギーと強固にむすびつき、また国威発揚を狙ったものだったといえます。こうしたナショナルな意識が前面に立ち、そしてまだ戦前のイデオロギーが完全に払拭できていないからこそ、「大阪万博」、あるいは「愛知万博」ではなく、「日本万国博覧会（日本国際博覧会）」となったのではないのでしょうか。愛知万博で市民参加が問題となったのは、こうした戦前の政治的イデオロギーから新たな段階へと移行する過渡期だったからなのかもしれません。それはともかく、万博の歴史は、近代国家が国民統合あるいは国家の近代化を行うための装置として発展してきたという歴史があるので、次回はさらに時代を遡ります。

引用文献

五十嵐太郎
2010　「21世紀のヴィジョンと愛知万博」五十嵐太郎・磯達雄『ぼくらが夢見た未来都市』PHP研究所、181-208頁。

ウォーラーステイン、イマニュエル
2008　『ヨーロッパ的普遍主義―近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辞学』山下範久訳、明石書店。

財団法人地球産業文化研究所
2013　愛・地球博公式ウェブサイト（2013年2月4日取得　http://www.expo2005.or.jp/jp/）

上海万博事務協調局
2010　中国2010年上海万博公式サイト（2013年2月4日取得　http://jp.expo2010.cn/）

武田徹
2011　『私たちはこうして「原発大国」を選んだ』中央公論新社。

古川隆久
1998　『皇紀・万博・オリンピック』中央公論社。

武者小路公秀
2011　「グローバル化時代のヒューマン・インセキュリティ―生命圏と文明圏の多様性の危機」『ヒューマンセキュリティ・サイエンス』6号、1-26頁。

吉見俊哉
2010　『博覧会の政治学』講談社。

2011　『万博と戦後日本』講談社。